九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宮沢賢治「注文の多い料理店」論 : 面白さに注目した作品解釈

河内, 重雄
北九州市立大学文学部 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1932373

出版情報：語文研究. 123, pp.15-28, 2017-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

宮沢賢治「注文の多い料理店」論

――面白さに注目した作品解釈――

河内重雄

一　本稿の狙い

宮沢賢治「注文の多い料理店」は、狩りのため山奥にやって来た二人の紳士たちを主人公とする、三人称の物語である。初出は大正十三年十二月発行の童話集『注文の多い料理店』（発行者は近森善一）。

作品梗概は以下の通りである。

二人の紳士は「イギリスの兵隊」[注1]の格好で山に狩りに来たが、あまりに山が物凄いため案内の猟師はいなくなり、連れてきた二匹の犬も死んでしまう。途方に暮れる二人がふと後ろを見ると、山猫軒と書かれたレストランがある。開き戸には「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」と書いてあり、二人が喜んで入ると、扉の裏には「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」と書いてある。廊下を進むとまた扉があり、その扉には「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」と書かれていて、裏にも注文が書かれている。次の扉にもそのまた次の扉にも表裏に二人への注文が書かれていて、二人はそれらに従い、持ってきた鉄砲や身に着けているものをはずしていく。最後には自分たちが食べられようとしていることを悟り、二人は逃げようとするが、扉は開かず、逃げることができない。二人が泣いていると、死んだはずの二匹の犬が扉を突き破って入ってきて、山猫軒の親方のいる部屋に飛び込んでいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中に立っている。いなくなった猟師もやって来て、安心した二

人は山鳥を買って東京に帰るが、先ほど恐怖で紙屑のようになった二人の顔だけはどうやっても元通りにならなかった。

「注文の多い料理店」（以下、本作とする）の先行研究については、青山英正氏[注2]が次のようにまとめている。なお、引用文中にある、宮沢賢治が書いたと思しき「広告文[注3]」を、青山論の引用の前に掲げておく。

二人の青年神[ママ]（「紳」の誤植）士が猟に出て路を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。

（以上、「広告文」）

先述の工藤哲夫は、「山猫」が貪欲で狡知にたけていることと、広告文に「糧に乏しい村のこどもら」の「反感」が謳われていることとの「矛盾」を、「山猫」を「単なる懲戒者」と見なすことで解決しようとした。「山猫」は、「山にいるのを幸い、『村の子どもら』から依託を受けて友情出演し、懲らしめという形で『反感』を表明した」にすぎないというのである。これは、「山猫」を自然の象徴としない代わりにその貪欲さや狡知にたけている性質にも目をつぶり、その役割を「村の子どもら」の「反感」のたんなる代弁者と位置づけることで、素朴な農村（＝村の子どもら）と狡知にたけた都会（＝紳士）という二項対立的図式を維持しようとした論だと言える。（略）

かつての「注文の多い料理店」研究は、自然（農村）対人間（西洋文明、都会）という二項対立的図式を設定し、「山猫」を前項と結びつけて後項に対する批判の視座としていた。やがて、「山猫」にそのような役割を当てられないことが明らかになると、広告ちらしの文言の言わんとするところを汲み取りつつ、「紳士」たちに対する批判の視座をどこに求めるかに読解の焦点が移っていった。須貝や府川は、「作品の中の特定の人物」以外にそれを求めたのであるが、語り手や読者ないし「理想の村」を、「糧に乏しい村の子どもら」と無条件に同一視できない以上、結局のところ工藤の言う「矛盾」は解決されていないに等しいと思わざるをえない。

紳士たちに象徴される西洋文明や都会への批判を本作に読み取るというのが、先行研究の大きな特徴の一つと言える。広告文の「都会文明と放恣な階級とに対する（略）反感」を本作に確認すべく、山猫や猟師、犬などが批判の主体とされて

きた。

他に先行論の特徴として、本作の面白さの源に関する考察が多い点を挙げることができる。渡部祐太「童話「注文の多い料理店」論――〈注文〉の二義性を中心に」[注4]はその典型であろう。渡部氏は本作における「読者を楽しませる」「エンターテイメント性」に徹底して注目している。実際には渡部氏のような論は珍しく、一つの論文に紳士批判とエンターテイメント性の指摘が比重の差はあれ見られるというのが、これまでの大まかな傾向ではあるまいか。

本稿の狙いは渡部氏の論文に近く、本作の面白さにこだわって本作を解釈してみたい。比重の差はあれと先に述べたが、先行論の力点は紳士批判にあることが多く、面白さに関する考察はそれに比べて手薄な観がある。面白さにこだわることで、作品の新たな解釈が可能となり、これまで見ることのできなかった文脈が見えてくると考える。

例えば、二人の紳士の「イギリスの兵隊」の格好について、山元隆春氏は次のように述べている。[注5]

（略）秋枝美保は、このテクストを評釈する中で、この〈イギリスの兵隊の形〉を、〈狩猟用の正式の服装、ハンティングドレスを着用している〉と解し、その理由として、〈十九世紀イギリスの歩兵の制服が（中略）狩猟家の服装とよく似ている〉ことを挙げている。秋枝は、さらにこの冒頭の一文の〈二人の若い紳士〉に対する形容に、〈兵隊〉の格好が用いられていることを、賢治の他のテクストにおける〈兵隊〉のイメージとかかわらせながら、そこに賢治の、〈西洋貴族の服装をまねた紳士たちの態度を、批判する意図〉を読み取る。つまり、〈制服〉の持つ〈没個性〉（秋枝）性に対する批判である。たしかに、この〈二人の若い紳士〉には、この一文に続く会話内容からも推測しうるように、かなり居丈高で、いかにも〈成金〉（秋枝）を思わせるような、卑しい雰囲気がある。

イギリスの兵隊の制服については、狩猟家の服装と似ており、二人の没個性性や成金趣味、ステイタス意識が読み取れるといった解釈をよく目にする。無論、こういった解釈は紳士批判の文脈でのものである。作品に流れる無数の文脈のうちの一つを掘り起こす作業として、妥当と言える。だが、この紳士たちの設定も、作品の面白さという観点で読むと、別の解釈が可能であろう。

関口安義氏は二人の服装について、「イギリスの海軍士官の服装を真似たものではないか」と指摘している。[注6]北村恒信『陸

海軍服装総集図典――軍人・軍属制服、天皇御服の変遷』[注7]には次のような一節がある。

陸軍では普仏戦争でプロシャが勝利したことから、フランス式軍制の欠点をきらい、遂次ドイツ式に模様がえが図られるようになった。服制についてみても、これらのことから、その範を欧州諸国に求め、海軍はイギリス式、陸軍はフランス式のちドイツ式が加味されるようになった。例えば明治陸軍軍衣の肋骨式胸飾はフランスに倣い、海軍のフロックコート式正衣はイギリス海軍に倣っている。

制服について、日本の海軍はイギリスを参考にしたという。同書には、陸軍は「山野を戦場とし広く散兵、最小戦闘単位が人」であったのに対し、「海軍の最小戦闘単位は艦」であったとの指摘がある。童話「どんぐりと山猫」のテーマの一つは団栗（どんぐり）の背比べと考えられる。本作の二人の服装を海軍と捉えれば、同じようにことわざで言うと、陸（おか）に上がった河童といった滑稽味を帯びてこないだろうか。

本稿では、本作の面白さにこだわることで可能となる解釈について考えてみたい。文明批判といった解釈と比べ、あるいは面白さに関する研究というのは高尚さもなく、地味に思われるかもしれない。が、作品の性格は作品ごとに異なり、本作の性格として面白みを指摘し得る以上、本作をこのような観点で解釈するのは必要かつ妥当なことと考える。

二　リアルタイムの観察と注文

本作の冒頭、二人の紳士の服装からして、読者がくすりと笑ってしまうような書き方がなされている。が、やはり本作における面白さの中心は、山猫と思しき親方が二人にあれこれ注文する場面にあろう。親方の注文について、山元氏は「山猫の親方と紳士たちの間に至っては、書きことばによる一方的な伝達しかありえない。」と述べている。[注8]書き言葉による注文ではなく、例えば案内人が話しかける形であれこれ注文してくるのであれば、二人の紳士は「なぜそんなことをするのか」と、注文の意図を案内人に直接問うことができる。一方的な書き言葉による注文であるため、二人は自分たちの解釈以外に頼るべきものがない。

一方的な書き言葉による注文は、一方的に話しかける言葉による注文とも異なる。渡部氏は前掲論文で次のように指摘している。

童話「注文の多い料理店」にはこれまで見てきたように〈注文〉の二義性による言葉遊び的要素を含んだエンターテイメント性が見られた。この〈注文〉は作中の〈注文〉形式が示すように、文字を媒体としてしか伝わらないものであると言っていい。なぜなら発話を媒体として〈注文〉が提示されていた場合、細かなニュアンスや互いの表情などによって、また、⑬「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあおなかにおはいりください。」で見られたような「お中」と「お腹」の違いはアクセントの違いによって解決されるものであろうためだ。

渡部氏の論では、案内人がいるような状況が想定されている。しかしながら、アクセントに関する指摘などは、案内人不在の一方的な話しかける言葉による注文にも当てはまる。また、話しかける言葉の場合、たとえ相手の姿が見えなくとも、あざ笑っているような感じや悲しそうな感じなど、声の調子も注文を解釈する上での情報となり得る。無論、声の調子で騙すことも可能だが、本作の親方については、そこまでの知恵があるかどうか疑問である。書き言葉であるため、二人は声の調子などから相手の真意をはかるようなことはできない。

一方的な書き言葉による伝達というと、大正時代であれば電報が比較的近いと思われる。短い片仮名の文章を受け取り、手紙と比べて返事をする必要性も低かったのではあるまいか。電報と本作における注文はどのような点で異なるか。電報は相手の置かれている状況も分からずに送り、相手が受け取るまでに時間がかかることも珍しくない。本作の注文は、相手を見ながらリアルタイムで相手に伝えたいことを書き示し、相手もリアルタイムで受け取っている。山猫らしき親方の視点で言うと、リアルタイムで相手を見つつ伝えたいことを伝えることができる点が、電報とは異なると言える。このような本作における注文の特徴がよく表れている箇所を、以下にいくつか引用しよう。

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかゝつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それからはきものの泥を落してください。」

と書いてありました。（略）

そこで二人は、きれいに髪をけづつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入つてきました。

二人は壺のクリームを、顔に塗つて手に塗つてそれから靴下をぬいで足に塗りました。（略）

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあつて、ちひさなクリームの壺がこゝにも置いてありました。

「さうさう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひゞを切らすとこだつた。こゝの主人はじつに用意周到だね。」

ブラシを置くや否や消えたというのは、親方が二人を常に監視していることを意味している。クリームについての注文と、再びクリームの入った壺が置かれていたというのも、リアルタイムで二人を見ながら注文・受け取りがなされていることを示していよう。このことから、例えば最初の扉の裏の一文「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」も、二人を見ながらとっさに付け加えたものと考えられる。二人をリアルタイムで観察し、気付いたことをその都度要求するため、扉のメッセージ・注文が合計十三もの数になってしまったのであろう。伝えるべきことをまとめた上で書き送る電報などとは異なる伝達であると言える。

リアルタイムで相手を見ながら一方的に書き言葉を送るというのは、現在の技術であれば、そのような状況をつくることは可能であろう。監視カメラで部屋や廊下の様子を見ながら、扉の表・裏にテレビやパソコンの画面で文字を示すなど、そう難しくはないと思われる。遊園地のアトラクションなどにあっても不思議ではない。しかしながら、本作が発表された大正当時は、このような状況は実現不可能だったのではあるまいか。二人の大人が騙される、リアルタイムで相手を観察しつつ書き言葉を一方的に送り付けるという状況の設定自体、ユニークな発想であると言えよう。

三　騙し騙される関係について

前章では山猫らしい親方が二人を騙すことに関して述べた

が、本作は騙し騙される関係が錯綜している。まず、親方が紳士たちを騙している箇所をいくつか確認してみよう。

① それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のやうな犬が、二疋いつしよにめまひを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまひました。（略）
　二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。
　そのときうしろからいきなり、
「わん、わん、ぐわあ。」といふ声がして、あの白熊のやうな犬が二疋、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました。

② そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でかう書いてありました。
　「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」
「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

③ 扉の内側に、また変なことが書いてありました。
　「鉄砲と弾丸をこゝへ置いてください。」
　見るとすぐ横に黒い台がありました。

④ すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。
　「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてください。」
　みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

⑤ するとすぐその前に次の戸がありました。
　「料理はもうすぐできます。
　十五分とお待たせはいたしません。
　すぐたべられます。
　早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」
　そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。
　二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。
　ところがその香水は、どうも酢のやうな匂がするのでした。
「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだらう。」

引用①の死んだはずの犬が生きていたことについては、親

方が「ナフキンをかけて、ナイフをもつて」と、食事の体勢にはいったため、魔力が解けてしまったことが原因であろう。つまり、二人の紳士は犬が死んでしまったと騙されたのだと解せられよう。この犬の死については、五十嵐淳氏が次のように述べている。(注9)

> 後に再び登場するのに、「死んでしまいました」と言い切っている。これは、語り手が読者をまどわしているともいえるし、導入部から二人の幻想は始まっているともいえるのではないか。

死んだはずの犬が実は生きていたというのは、語り手が読者を騙しているという解釈である。この点については、山猫らしき親方が語り手を騙した、あるいは語り手は親方に近い存在だと考えることもできようか。ともあれ、重要なのは、親方が紳士たちを騙すと同時に、読者も語り手によって騙されているため、騙し騙される関係が二重に見出されるということだ。このことは引用⑤にも当てはまる。語り手は「香水」と言っているが、実際には酢であるからだ。読者が騙されるかどうかはともかく、素朴に語り手の言うことを信じる訳にはいかないのは確かであろう。

本作では、引き戸ではなく「開き戸」の表と裏に、ひとつながりの文章が書かれている。それを二人の紳士が読んでいくという形をとっている。(注10) これは、二人の紳士が本のページをめくって読み進めていくイメージに近く、本作を二人の読者が読み進める姿に重なると考えられるのではあるまいか。実際、山猫らしき親方はリアルタイムで気付いたことを注文として書いているため、扉数は七、頁数十三と、本と言うに足る分量になっている。本作の初稿の執筆時期は、童話集初版本の目次の記録によると大正十年十一月十日。この時点では宮沢賢治の妹トシはまだ亡くなっていない。前掲の渡部論文には次のような指摘が見られる。

> 大正十年（一九二一年）、二十五歳の宮沢賢治が高知尾智耀の勧めにより「法華文学ノ創作」として童話制作へ熱烈な勢いを見せ始めたことは有名だが、それ以前に大正七年（一九一八年）八月、二十二歳の宮沢賢治が弟妹に読み聞かせるために童話「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」を書いていることはあまり注目されていない。

先に、紳士二人の姿が読者二人の姿に重なると述べたが、読者二人というのも、兄が妹や弟に、あるいは親が子に読み

聞かせるといった形であろう。紳士二人の関係も必ずしも対等ではない。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかへしてみて言ひました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしさうに、あたまをまげて言ひました。

二人は云ひながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずゐぶん多いでせうがどうか一々こらへて下さい。」

「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯(か)ういふことだ。」

「クリームをぬれといふのはどういふんだ。」

「これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。(略)」

一人が疑問を呈し、もう一人が説明をするといった、教える・教わる関係である。片方がもう片方に説明するという形も、本作の読者二人の読書行為に重なるのではあるまいか。例えば、「どうして犬は死んじゃったの?」「あんまり山が物凄いからだってさ」などと尋ね、答えながら読んでいくのではないだろうか。本作の最後、犬が突然入ってくる場面も、「犬は死んでなかったんだね」「僕たちもこの二人みたいに騙されてたね」などと話しながら読むことになると考えられる。本作は年上の読者が年下の読者に読み聞かせることを想定して書かれた物語だと考える場合、年下の読者がどのように反応し得るか、それに対し年上の読者がどう反応するであろうか、といったことが問題となろう。

騙し騙される関係について付け加えて言えば、紳士二人の会話によって読者が騙されてしまう側面もあろう。例えば次のような会話に読者は騙されてしまわないだろうか。

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなかうさ。」

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖つたものは、みんなこゝに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。（略）

「は、あ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気のものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯（か）う云ふんだらう。」

紳士たちのこれらの会話により、読者は建物の不自然さや注文の内容等に疑いをもつことなく読み進めることになると思われる。親方が紳士を騙し、語り手によって読者も騙されたように感じ、紳士たちによって知らず知らずのうちに読者はごまかされてしまう。本作は騙す・騙される関係が錯綜して見えるのはそのためだ。

本作が収録された童話集『注文の多い料理店』の「序」には次のような一節がある。

けれども、わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

「あんまり山が物凄いので」犬が死んでしまった、などという語りを素朴に信じてしまった本作の読者二人は、紳士たちを笑うことはできない。騙し騙される関係が錯綜しているが故の面白さ、その中で見つけることのできる「ほんたうのたべもの」とは、私たちは人の失態を笑うことなどできないというメッセージであると考える。一人で本作を読むのであれば、自分がまんまと騙されてしまったことを知る者は自分一人である。しかし二人で読む場合はお互いに騙されたことを知っている。騙されたというのをなかったことにすることはできない。だがそれ故にこそ「ほんたうのたべもの」になる、と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読むことの意義は、こういった点にもあると言えよう。

四　童話集の他作品について

本稿二章でユニークかつ騙されやすい状況の設定について、前章では網の目のような騙し騙される関係性について述べた。紳士が親方に騙されたように、読者も語り手に騙されていた

と考えられるが、童話集の他作品だと「狼森と笊森、盗森」などは、読者は騙されたように感じると思われる。例えば安藤恭子氏は次のように指摘している。(注11)

しかし、「林の底」と「狼森と笊森、盗森」の大きな違いは、「狼森と笊森、盗森」の〈聴き手〉が話し手の「巌」を「まったくその通りだつたろう」と信頼し、「巌」の話すままに全面的に話を展開させきっているところである。話そのものに矛盾はがないわけではない。森の名前の由来を話すと言いながら、話の途中でその目的がずれ、「名からしてぬすと臭い」と既に森に名前がついているとこなど、「林の底」の〈聴き手〉＝〈語り手〉であるならば当然矛盾を指摘するところである。

「狼森と笊森、盗森」は、小岩井農場の北の森（狼森、笊森、黒坂森、盗森）に「どうしてこんな奇体な名前がついたのか」、黒坂森の「巨きな巌」が「わたくし」にある日話してくれたという設定である。以下は「狼森と笊森、盗森」の一節。

さてみんなは黒坂森の云ふことが尤もだと思つて、もう少し北へ行きました。

それこそは、松のまつ黒な盗森でした。ですからみんなも、

「名からしてぬすと臭い。」と云ひながら、森へ入つて行つて、「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

名前が付いた理由について話すと言いながら、盗森については「名からしてぬすと臭い」と、すでに名が付いており、一見したところ名前の付いた理由が語られていない。このことは狼森や笊森も同様であろう。狼森については、狼たちの歌の歌詞「狼森のまんなかで」が名の由来のようだが、これも狼たちが歌う以前に狼森という名がすでについていたものと思われる。笊森についても「笊森の笊はもつともだ」と、すでに名があるような語りになっている。安藤氏が「矛盾」と指摘するごとく、「狼森と笊森、盗森」の語りも信用してよいものかどうか、読者は戸惑うのではあるまいか。

名前＝固有名詞は対象を唯一無二の存在足らしめる機能をもつ。例えば、市販のボールペンに「太郎」という名前を付けた場合、その太郎という名のボールペンはかけがえのない、唯一無二のものと見なされる。「狼森と笊森、盗森」の四つの森は、名前が付く以前からそれぞれ「おれはおれだ」という意識をもっており、名前がなくとも固有名詞的な存在＝唯一

無二の存在として現れてきている。名はもっていないが、名前をもっているも同然の存在、と言い換えてもよい。仮に、四つの森がそれぞれそのような自己意識をもっていないとすれば、森を四つに分けずに全体に一つの名を付けるなど、人間の都合によって幾通りかの付け方が可能なはずである。しかし、それぞれが自我をもっているため、人間は森を四つの全く異なる森として見なす以外にない。

それぞれの森にそれぞれの名が付いた理由に関して、「狼森と笊森、盗森」には次のような一節が見られる。

そこでみんなは、もっともだと思つて、こんどは北の黒坂森、すなはちこのはなしを私に聞かせた森の、入口に来て云ひました。

「粟を返して呉ろ。粟を返して呉ろ。」

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたへました。

「形を出さないで」とあることから、名の由来はそれぞれの姿形であると解釈できよう。その意味では、「形を出さない」黒坂森以外、「どうしてこんな奇体な名前がついたのか」語られていると言える。狼森には狼が九匹おり、笊森には大きな笊があるからだ。黒坂森の巌は全ての森の名の由来を語ると

は一言も言っていない。黒坂森の名の付いた理由＝黒坂森の「形」が語られていないからといって、信用できない語りだとは言えない。

つまり問題は、名前の決定と「形」の出現に関する語りの順番＝時間認識にある。盗人であることが分かった後で事後的に名が付くという語り（「形」が名前に先行）ではなく、このあと粟を盗んだことが分かるという事前的・先取り的な語り（名前の決定を先に語る）であるため、信用できない語りに見えてしまうのだ。事後的な発想に慣れた読者には、事前的な発想は飛躍したものに思えてしまうものである。森たちはそれぞれ固有名詞的な意識をもっている。そのため、あとはきっかけ＝「形」の発生があれば、自ずと名が生じる（自分で自分に名を付けることができる）状態にある。先の引用の「名からしてぬすと臭い。」という「百姓」たちの発言から、百姓たちや黒坂森の巌、語り手の「わたくし」などが名付け親であるとは考えにくい。「いつごろ」や「いちばんはじめから」といった語りから、巌や語り手に時間についての意識があることは確かである。語り手や巌、百姓や森たちの時間感覚が、私たち近代の読者の数値化された直線的（リニア）な時間感覚と異なり、私たちからすると事前的な発想・語りであるため、「形」の成立と名の発生との関係・順番に私たちは違和を感じてしまうので

はあるまいか。

百姓たちや黒坂森の巌が名付けたのではなく、自然発生的に名が生じたというのは、森の自律性と関わると思われる。名付ける・名付けられるという関係は、上下関係、支配・被支配の関係であるからだ。語り手が信用できないように見える理由は、本作と「狼森と笊森、盗森」とでは異なっている。本作の場合は騙し騙される関係の複雑さ、面白さに積極的に関わっている。「狼森と笊森、盗森」では森や百姓、語り手たちの時間感覚が私たちの感覚と異なるため、信用できない語りに思えてしまう。童話集に収録されている本作や「狼森と笊森、盗森」以外の作品の語り手にも、信用してよいものかどうか迷うと思われるものがある。

たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅（ひび）がはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、烏を握んで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。烏の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の烏も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

いや、ちがひました。

さうぢやありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたのです。

（「烏の北斗七星」）

けれども、その立派な雪が落ち切つてしまつたころから、お日さまはなんだか空の遠くの方へお移りになつて、そこのお旅屋で、あのまばゆい白い火を、あたらしくお焚（た）きなされてゐるやうでした。（略）

「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすはうしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたやうでした。そして毛皮の人は一生けん命走つてきました。

（「水仙月の四日」）

なぜ語り手が信用できないように見える必要があるのか。作品ごとに展開に即して検討する必要があると言える。また、童話集のタイトルは本作からとられており、本作が二人で読むものであるとすれば、童話集収録の他作品についても二人の読者という観点で考察することは可能であろう。最後に以上を指摘し、筆を置くこととする。

実際に怒ることができる。美しい風景で見る人の心を和ませる、近代以降の田舎のポジティヴな描写・イメージ形成の流れにおいて、本作の個性を探ることになろう。侵入者に牙をむく田舎のイメージという点では、柳田国男の民俗学なども視野に入れることができようか。いずれにせよ、本稿ではその狙いから指摘だけにとどめる。

注11　「宮沢賢治『林の底』――童話集『注文の多い料理店』の戦略へ」（『国文学　解釈と鑑賞』平成六年四月）。

（こうち　しげお・北九州市立大学文学部准教授）

注

注1　以下、宮沢賢治の童話作品の引用は全て『宮沢賢治全集8』（昭和六十一年一月　筑摩書房）による。本稿における引用文中の傍線は全て筆者によるもので、ルビは適宜省略した。

注2　「宮沢賢治「注文の多い料理店」論――猟師・犬・団子への着目」（『明星大学研究紀要』平成二十三年三月）。

注3　引用は『新校本宮澤賢治全集　第十二巻　本文篇』（平成七年十一月　筑摩書房）による。

注4　『東アジア日本語教育・日本文化研究』（平成二十三年三月）。

注5　「読むという行為成立のダイナミズム――「注文の多い料理店」におけるテクスト・ストラテジーの検討」（『語文と教育』昭和六十三年八月）。

注6　『賢治童話を読む』（平成二十年十二月　港の人）の「注文の多い料理店」より。

注7　平成八年九月、国書刊行会。

注8　同注5。

注9　「「読み研」方式で読みとく「注文の多い料理店」」（『研究紀要Ⅸ』平成十九年八月）。

注10　紳士二人が読む扉の文章については、大正当時の様々な商品に関する広告文と結び付けて解釈されることが多い。読者の欲望をコントロールする、広告の戦略性と絡めての解釈である。広告の戦略性について考えるのであれば、私たちはむしろ、本稿の最初に引用した「広告文」の戦略性について考察すべきであろう。例えば、「糧に乏しい村のこどもら」の「反感」といった内容を素朴に信じ、本作に見出そうとするのではなく、広告文での怒れる村人たちのイメージ形成という戦略性に目を向けるべきではあるまいか。イメージが形成されれば、村人たちは